



山本恭司

島根県松江市生まれ。15歳でギターを始め、18歳でヤマハ・ネム音楽院に入学。その頃より天才ギタリストとの呼び声高く、在学中にBOWWOWのリード・ギタリスト、リード・ヴォーカリストに抜擢される。デビュー当時はキッスやエアロスミスとのツアーが大きな話題を呼び、豪快で圧倒的なサウンドとギターテクニックによりジャパニーズ・ヘヴィメタル・ムーブメントの先駆けとなった。その後VOW WOWを結成しロンドンをベースにヨーロッパ、アメリカで約4年間活動、イギリスでチャートインするなど海外での評価も高く、メタリカ始め海外有名アーティストへの影響力も大きい。また、バンド活動以外にもギター・インストゥルメンタル・アルバムのリリースや矢沢永吉のツアーへの参加、ジャズ・フュージョン系ミュージシャンとのセッション、アコースティックの弾き語りや他アーティストのプロデュースに至るまでその幅広い音楽性を武器に世界の音楽シーンで活躍をしている。

人間生きていくと色々なことがあるもんだとつくづく思う。僕はギターを弾き、歌を歌う事を生業としていて、世間的にはロック・ミュージシャンとして知られている。高校生の時から髪を伸ばし先生にはいつも目を付けられ、それでも隙さえあればギターを弾いている、そんな子供だった。

昔はよく言われていた——「エレキを持っていくヤツは不良だ！」って。ところが、今だって弾いているのにどういうわけか大学の立派な文化情報誌にこうしてエッセイを書いている！十年前は同級生で俳優の佐野史郎と共に松江南高の四十周年のイベントで全校生徒と先生方を前に講演までやっている!! 一体何が起きたんだ!!

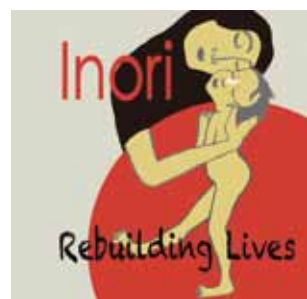
でも実際のところ、僕はエレキを持つ前の方がずっとワルかったと思う。はげ口のないストレスやコンプレックスを抱え、

え、それを歪んだ形で出すしかなかった僕を救ってくれたのがエレキ・ギター、そして音楽だった。松江というとても保守的な街に生まれ、周囲をお寺に囲まれた静かな場所に育った僕はその反動からか、とても反動的で大きな音を立てるのが好きな子供だった。水郷祭や鑿行列を真似、ひっきり返って押し入れの戸を足でどんどんと蹴り続けるようなね。

故郷が奏でさせてくれる音楽

そんな僕でもとてもおとなしくなる時間があった。それは毎日のように自転車で行った宍道湖畔で夕日を覗いている時。まだ今のように綺麗に整備されていない白濁公園の湖へと降りる階段の途中に座り、フナムシの行列を眺め、あの独特の「ちゃぼん、ちゃぼん」という波音を聴きながら陽の沈むのを穏やかな気持ちで待つ。向こうの方ではトンビが急降下して魚を捕まえると誇らしげに飛び去っていく。そしてドラマティックとも言える美しい夕日夕焼けそしてその余韻……。

流れる色々な音楽からも多くを学んだ。あれから四十年近い月日が流れたというのに、気持ちもやっけていることもあの当時のままでここまで来られたことは我ながらスゴイと思う。海外にしばらく住んで音楽活動を行い、高校時代は雑誌でしか見ることもなかったアーティスト達とも共演出来るようになった。そして今自分の音楽を振り返ってみる時、この僕が育った街がどれだけの影響を与えてくれたのかを知ることとなる。



祈り—山本恭司 (BOWWOW) プロデュースによる東日本大震災復興支援チャリティーアルバム。
発売日：2012年10月3日

僕の中の心にはいつも故郷松江があり、今も優しく見守っていてくれる。これからもこの素晴らしき街を、音楽を通じて世界に向けて発信し続けたいと思っています。



〈あらびかコーヒー〉で楽しむ

六子ののんびり+ ほっこりライブ

大家里沙





はじめに

本誌「のんびり雲」は今年で六号。特集は喫茶店です。そこで、「のんびり雲」編集部は特別企画を実施することにした。——なんと、島根が生んだ歌姫の六子さんに、今回の特集にご協力してくださったへあらびかコーヒーでライブをしていただいたのです。

初めての試みで編集部一同、緊張と不安でいっぱいでしたが、多くの人に支えられ無事に成功！ そんな、終始笑顔で行われたライブの模様と、六子さんの素

敵な素顔に迫った単独インタビューで、「のんびり+ほっこり」してください。

■優しく美しい六子さんの歌声に癒された——のんびり+ほっこりライブ

今回の特別ライブは、平成二十四年七月九日に松江市袖師町にある喫茶店へあらびかコーヒーで行いました。午後五時過ぎ、明るい笑顔で会場入りされた六子さんは「カフェでのライブは初めてなんです」とワクワク・ドキドキでいっぱ

いの様子。リハールでは、明るく可愛らしい表情とは一変して真剣なプロの表情に変わり、音合わせを念入りにしておられました。

午後六時、リハールが終わるとお客さんが続々と来場。編集部スタッフは、お店のお手伝いや駐車場係として頑張りました。店内は、お客さんが談笑に花を咲かせたり、あらびかコーヒー自慢のカレーを食べたりコーヒーを飲

んだり、とても和やかなムード。そして、ついに開演の七時。少し緊張した面持ちで六子さんがステージに登場!! 大きな拍手と歓声が会場に響きます。今回は六子さんの楽曲アレンジやレコーディングを手がけている「金ちゃん」こと金崎圭介さん(お兄さんと二人で「届けピト」として活躍中)にサポートしてもらったのライブです。

ステージと客席の距離は約一・五メートル。「前からカフェライブには興味があったので、今回やっと実現して嬉しい」と六子さん。さあ、素敵な夜の幕開けです。

——世代をこえ、青春の歌声や歌詞に酔いしれ、忘れられない夜になりました。(アンケートより)

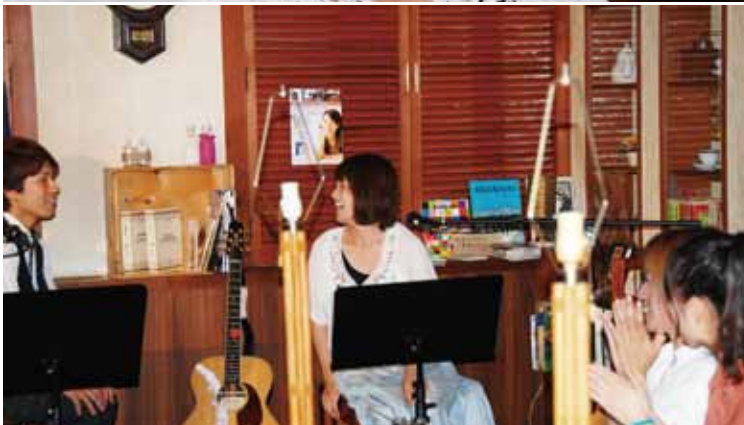
第一部では、全七曲を披露していただきました。六子さんの歌の特徴は、ふるさとの歌、恋愛の歌といった感情豊かな曲が多いところではないでしょうか。まず披露していただいたのが、七月にぴったりの「七夕」。「この時期にしか歌わない季節の歌」という切ない恋の歌に、会場の全員が真剣な表情で六子さんの歌声に聴き入っていました。

曲と曲の間のチューニングの際には、六子さんと金ちゃんの面白おかしいトークで会場内はたいへんな盛り上がり。途中、ステージから注文したオレンジジュースが届き二人で乾杯するなど、ユーモア溢れる姿も見せてくれました。そんな六子さんが三曲目に披露してく



◎セットリスト◎

- 第1部
- 七夕
- あなた
- グラディ
- ハーモニ
- 輝く季節
- さようなら
- 雨
- 第2部
- 最後の強がり
- 夜空
- 空に雲があるように
- 自分らしく
- 大切なこと
- 優風
- だんだん
- en 絆



れたのが、お父さんに贈る歌——「グラ
デイ」。曲のタイトル「グラデイ」は、
グライダーとダディをくつつけた言葉だ
そうです。どうしてグライダーなのかと
いうと、それはお父さんが飛ぶものが大
好きだから。お父さんへの愛が伝わる素
敵な一曲。会場に来ていた全てのお父さ
んのために歌ってくれました。

——いつも遠くからしか見られな
かった六子ちゃん。今日は間近で
表情もよく見え、歌声にも迫力が
感じられました。(アンケートより)

島根県食育イメージソングの「ハーモ
ニー」や「中海四季紀行」のテーマソ
ングの「輝く季節」といった島根になじみ
の曲も披露してくださいました。六子さ
んの歌に込められたメッセージ、そして
パワフルで安定したパフォーマンスに皆
さん感動している様子でした。

しかし、「輝く季節」ではチューニン
グを失敗して音を間違えてしまうという
ハプニングが！ そんなハプニングも持
ち前の明るさと人柄の良さで笑いに変
え、会場のほっこりムードも一層高まり
ました。お茶目な六子さんも素敵です。

高校が松江工業高校の機械科で、クラ
スに女子が自分一人しかいなかったとい
うエピソードも話してくれました。「旋
盤が大好きで、鉄を削るのが楽しくて仕
方なかったです」と、見た目とは裏腹
に男性っぽい一面を持つ六子さん。そん
な六子さんが経験した恋の曲では、皆さ

ん思い思いの感情に耽っている様子でし
た。そして、第一部はあっという間に終
了してしまいました。

——しっとりとした歌、元気にな
れる歌。二時間日常のことを忘れ
てハマりました。「自分らしく」と
いう歌が一番グッときました。(ア
ンケートより)

第二部は、新曲「最後の強がり」から
スタートしました。また、自然への思い
を込めた曲「空に雲があるように」では、
手拍子で会場はノリノリに。「手拍子が
できる曲は、すごく楽しい。お客さんの
笑顔が見ることが嬉しいです」と六
子さんも終始笑顔。こんな曲は地元愛に
溢れた六子さんならではの視点から生ま
れるのでしょう。

そして、アンケートで人気だったのが
悩んでいる人の背中を押す曲「自分らし
く」。この曲については、本当にたくさ
んのお話をいただきました。「私も今
まで悩むことがたくさんありました。好
きなことを仕事にして、やっぱり趣味の
ままのほうが良かったのかな？と悩むこ
ともありました。最近はずごくやりが
いを感じていて楽しい毎日を送っていま
す。悩んでも道はたくさんある。悩んで
いる人の背中を押す曲です」と熱く語っ
てくれた六子さん。歌えることが幸せで
あり、人と人とのつながりが大切なのだ
と語る姿。そして、その思いがギュッと
詰まった曲に聴いていて涙を流すお客さ

んもおられました。

——音楽の心地よさ、素晴らしさはもちろん、人と人との出会い、つながりを感じた夜でした。(アンケートより)

そして、終演の時間が迫ってきました。



■単独インタビューの様子。のんびり+ほっこりムードで進みました。

最後の曲は、六子さんの人生を大きく変えた曲「だんだん」です。サビを会場の全員で歌いました。ステージと客席が近いからその一体感が会場は笑顔が満開です。こうして、六子さんのライブは終了——と思いきやアンコール!! すでに十四曲を披露した六子さんですが、最後までパワフルな歌声を聴かせてくれました。アンコール曲は「絆」。お客さんも一緒に合いの手を入れるなど、たいへんな盛り上がりでした。

全十五曲、二時間にも及ぶライブに皆さん大満足の様子。本当にアットホームという言葉がぴったりの「のんびり+ほっこり」したライブになりました。

■六子さんの素顔に迫る!?——「のんびり雲」独占インタビュー

ライブ翌日、再び六子さんとお会いしインタビューをさせてもらいました。明るさ、面白さ、可愛らしさ……色々な顔の六子さんに出会えました。取材場所はライブ会場としてお世話になったへあらびかコーヒ〜です。あらびかコーヒ〜自慢のアイスコーヒ〜を飲みながら終始笑顔で「のんびり+ほっこり」とい

ンタビューは進みました。

カフェライブ——癖になっちゃいます

——ライブお疲れ様でした。ライブは、どうでしたか?

「カフェライブは初めてで緊張しました。二時間も座りながらギター二本だけでライブするのも初めてだったので初体験がたくさんでした。でも、しっかりと聴くといった感じと盛り上がる感じの両方がある、本当にアットホームなライブで楽しめました。癖になりそうです(笑)。またやりたいですね。兄弟の遊吟もカフェライブにはまって

いるので、「あらびかさん良かったよ」と話しました。お客さんとの距離も近く表情も分かったので、路上ライブを思い出しました。二時間があっという間でしたね」

——「のんびり雲」の特集にちなんで、六子さんの喫茶店の思い出について伺いたいのですが……何かありますか?



「昔、お父さんが喫茶店で店長をしていたことがあるんです。私、記憶にはないんですけど、写真があつて……喫茶店によく連れて行ってもらってたそうです。実は、あらびかコーヒ〜さんにも来たことがあるらしいんです! お店オリジナルのマッチ集めてましたね。お父さんとのマッチ集めが、コーヒ〜を飲めない代わりに楽しみでした」





■六子さん・金ちゃんとの記念写真。(上段)「のんびり雲」編集部員。(下段)あらびこコーヒーの皆さん。

てー!!」って感じていた(笑)。本当に喜怒哀楽が激しいんです。私も喜怒哀楽が激しくて、そこが似てますね。でも、感情を表に出すタイプってところは、音楽活動に役立つと思います」

—仲良し家族といったイメージがありますか？

—六子さんは、コーヒー好きですか？
「ここ二、三年の間に飲めるようになったんですよ。苦みが駄目で砂糖とミルクを入れると美味しい(笑)。ブラックは、あの苦みが駄目なんです。最近は少しずつ苦みの美味しさが分かるようになってきましたけど。でも、まだまだコーヒーに関しては「ひよっこ」です(笑)」

思い出深い曲は「グラディ」——
家族は大きな存在です

—さて、ライブでは全十五曲を熱唱していただきましたが、六子さんにとって思いの曲はなんでしょう？

「ライブでも歌わせてもらった「グラディ」ですね。初めて全部を自分で手がけた曲なんです。この曲をライブで初めて披露した際に、サプライズで「お父さんに贈ります」って、ライブに来ていたお父さんのために歌ったんです。したらお父さんが大号泣しちゃって、私の歌声より大きな声で泣くんですよ。「やめ

が、やはり仲良しなんですか？
「仲良しですね。両親は良い意味で友達みたい。両親はアメ(父)とムチ(母)って感じでバランスが良いですね(笑)。両方優しいですけど。兄弟とは、音楽というつながりがあるので自然と音楽の話します。ライブでもあつて高めあえる仲。最初の頃は、全員が音楽という道に進んだので「親不孝きようだいな」って話したりもしていました。でも、母が「自分もアイドルになりたかったけど反対されて諦めたから、音楽の道に進んでくれることは嬉しい」って言ってくれて……。身近な人が応援してくれるのは、本当に嬉しい。家族は私にとって大きな存在です」

温かさときれいな風景がある**島根**——
ここにいてから私は歌が作れるんです

—地元山陰が大好きな六子さんですが、島根の魅力または好きなところはどこで



ですか？

「六道湖が好きです。六道湖からの風景……特に夕日のオレンジと茜色が低く連なる山の中に沈んでいく、そんな絵のようなグラデーションが好きです。どの景色よりもきれいな！この風景は、なくてはならない存在。私のパワースポットです。あとは、人が優しいところも魅力。この辺の人って最初はちよつと距離を取るタイプが多いけど、近くなると一気に仲良くなれるというか、距離が縮まるじゃないですか。そんな温かさや風景があるからこそ六子の歌ができます。ここにいてから私は歌が作れるんです」

—そんな素敵な島根が生んだ歌姫の六子さんですが、六子(ろこ/むっこ)という名前の由来はなんですか？

「本名の六子(むっこ)は、兄が通っていた幼稚園の園長先生の妹さんが六子(むっこ)さんだったことが由来です。その園長先生が「自分の妹が六子という名前ですごく幸せな人生を送っているから、六子は幸せになれる名前」とおっしゃったのがきっかけ。六子(ろこ)という今

の芸名は、事務所の皆で決めました。最初は、Loco(ろこ)だったんですけど、ふるさとの歌をうたうアーティストっぽくないってことで、本名の六子(むっこ)の読みを変えて六子(ろこ)になりました」

音楽で**島根に恩返し**をする——それが私の夢です

—最後に六子さんの「夢」を聞かせてもらえますか？

「地元で活動しながら全国の人に知ってもらうこと、認めてもらうことです。「島根じゃないと聴けない歌」を届けたいです。音楽で島根に恩返ししたいですね。音楽で全国から多くの人に島根に来てもらって、島根を盛り上げたいです。あとは、ずっと地元で歌い続けていくこと。島根から絶対出ないと約束できます。「出ていけ！」と言われても出ません(笑)」

■おわりに

いかがでしたか？ ページ数の制約があり、「書きたいのに書けない！」といった内容もあり、全てをお届けできず残念です。特別付録で「六子book」を作成したい勢いでした。編集部も初めての試みなので、至らぬ点が多くあったライブでしたが、楽しんでいただけたようであれば幸いです。のんびり+ほっこりを、身体全体で感じた夢のような一時でした。**だんだん。**

(おおよ・りき/文化資源学系二年生)



創業三十四年目を迎えた

あらびかコーヒー

(松江市)

赤木紀元



■使いこまれたやかんでコーヒーを淹れるマスターとそれを見守る奥さん。

あらびかコーヒー（松江市袖師町）に取材でおじゃましたのは六月三十日。ここを会場に「六子ののんびり十ほっこりライブ」が開催される九日前でした。大きな通りに面していないため初めての人にはちよつとわかりにくいのですが、松江警察署の南側にある広い駐車場の南西の角の辺りにあります。

店内は木のテーブルと椅子が並び、床は板張り、壁や天井にもたくさん木が使われています。これらの木のおかげなのか、落ち着きのある雰囲気は漂っていて、ほつとひと息つける空間です。

あらびかコーヒーがオープンしたのは一九七九年六月十六日で、私たちが訪れたときには創業三十四年目を迎えています。私たちは、マスターの国田和彦さん（71）、妻の隆子さん（64）、それに昨年突如、店の大黒柱見習い（？）となった次女の中村英子さん（38）の三人にそれぞれお話を伺いました。

創業三十三年目の危機

今年、創業三十四年目を無事に迎えたあらびかコーヒーですが、実は三十三年目に入った昨年七月十二日、大きな事件が起きました。それまでお店の大黒柱として働いてこられたマスターが交通事故に遭われたのです。

七月十二日はちょうど店の改修工事を始める予定の日でした。あらびかコーヒーはそれまで袖師店と北堀店の二店舗があつたのですが、北堀店をやめて袖師店だけにし、北堀店に設置してあつた焙煎機を袖師店に移動させる計画でした。そのため店内の壁を一部ぶち抜いたりする必要があり、そのほか傷んだところの修理もあわせてすることになっていたのです。

マスターの入院で改修工事どころではなくなりまして。頭を強く打ったマスターは、短期間で退院できても、これまで通り大黒柱としてお店を担っていくの



は難しい様子でした。国田さん夫妻には娘さんが三人いますが、みんな嫁いでいて、お店を継ぐ予定の人はいません。お店を閉めるという話も持ち上がったそうです。

しかし、そうはなりません。三人の娘さんのうち唯一嫁ぎ先が松江で、お店の近くに住んでいた次女の英子さんが、家族の協力もあつて両親を支えて働くことになったのです。英子さんは「あらびかコーヒーがなくなってしまうたら、父は生きがいをなくしてしまうのではないか」と心配したそうです。

改修工事は計画通り行うことになり、英子さんはお店の経営を担えるようになるため、島根県商工会連合会などが開いている「女性のための創業塾」で勉強することになりました。そして、事故から三ヶ月余りが経った十月十七日、あらびかコーヒーは新たな大黒柱を得てリニューアルオープンを果たしたのです。



「サラリーマンの妻になる！」
英子さんはそれまでお店を継ぐ気は全くなかったそうです。子どものころから両親の働く姿を見てきて、自分は絶対に喫茶店は継がない、サラリーマンの妻になると心に決めていました。学校から帰ったとき両親が家にいない生活がとて

も寂しかったからです。
マスターが脱サラして東京から松江に帰り喫茶店を始めたとき、三人の子どもたちは九歳、六歳、三歳でした。それまで専業主婦だった隆子さんは、夫と一緒にお店で働くことになりま



■マスターは焙煎について詳しく説明してくださいました。

す。子育てと喫茶店の仕事の両立に悩みました。忙しいとどうしても仕事優先になり、子どもたちに手をかけてやれず、寂しい思いをさせてしまい、自分は母親としてこれでいいのかと葛藤したそうです。

そんなとき、心の支えになったのがNHKのラジオ教育相談でした。なかでも、児童心理学の昌子武史という先生の話にはとても心を打たれたそうです。もう今から二十年ほど前のことですが、その昌子先生があらびかコーヒーにたまたま来られて、お話ができたことが本当に嬉しくて思い出に残っていると話してくださいました。

英子さんは、「今はまだ両親にフォローしてもらって仕事をやっているから継ぎきれない気もするけど、自分の家庭のことと両立しながら過ごす毎日はとても充実していて楽しく働いている。一番下の子どもが小学校に入る三年後くらい

には、正式にお店のことをどうしようか考えている」と言っておられました。

脱サラUターン

マスターは元々島根の方ですが、上京してサラリーマンをしておられました。しかし、大の地震嫌いのマスターは、関東で大きな地震が起こると言われていたことが気になり、島根に帰りたいと考えていたそうです。また、島根で暮らす親の様子も気になっていました。勤めていた会社の方針に疑問を抱いたことも、帰りたいと思ったひとつの理由です。

ですが、当時三十八歳で三人の娘の父でもあったマスターは、島根に帰って仕事に就けるかもわからず、どうしようか悩んでいたそうです。そのとき頭に浮かんだのが東京で出会ったおいしいコーヒーのことです。松江でおいしいコーヒーを作って周りのみんなを喜ばせてやろう。そう思って、マスターは松江で喫茶店を開く計画を立てます。

東京珈琲専門学院という学校に一月ほど通って、コーヒーの作り方や喫茶店を開くために必要な知識を身に付けました。あらびかコーヒーの入り口には「珈琲は瞬間の美学 東京珈琲専門学院推薦店」と書かれたプレートが掲げられてい

ます。

喫茶店を開くことには周囲からの反対も少なからずあったそうです。しかし、マスターはそういった反対を受けると、よけいに成功させてやろうと意気込んだと言います。一九七九年の六月十六日、あらびかコーヒーの開店日、若い人たちが新しくお店を開くのと同じで、期待と希望に満ち溢れていたそうです。今のように不景気でもなかったため、熱意があれば絶対にうまくやっていたらと思っていました。

しかし、当初はなかなか売り上げが伸びず、開店して三〜四カ月ころには、あまりに痩せてベルトがユルユルになったと言っておられました。それでも、努力して努力して徐々に客足も増え、お店は軌道に乗っていきます。これまでなんとか続けてこられたのは時代が良かった



■水出しコーヒーの具合を確認するマスター。



■ (上段) 娘の英子さん。(下段) あらびかコーヒー前にて。



■開店間もないころのメニュー。

からかもしれないし、心がけが良かったからかもしれない、——そう語ってくださいました。

珈琲は瞬間の美学

あらびかコーヒーでは開店以来ずっと手書きのメニューを作っておられて、昔使っていたメニューも大事に保管してあります。開店間もないころのメニューを何冊か見せてもらいました。原稿用紙に手書きの文字。飲み物も食べ物も種類がたくさんあって、しかもコーヒーは解説

付きなので、かなりのページ数の冊子です。手作りの表紙を開くと、最初に「珈琲は瞬間の美学」とあり、次のような詩が書いてありました。

たかゞ一杯のコーヒー
まるで鳥の羽のような
雲の舞い落ちる音のような
でも、その小さな世界に
限りない緊張を見出して

コーヒのいのちを大切にとり出し
何かの出会いを託したいと思う
マスターは開店以来ずっと自家焙煎を

続けておられます。仕入れ先を厳選し、仕入れた生豆をマスターの経験と勘を頼りに煎っておられます。取材の際に焙煎機を見せていただきましたが、そのときの説明は特に力が入っていたように思います。お客さんに満足してもらうためには妥協しない、そう話すマスターからコーヒへの並々ならぬこだわりが感じられました。

事故に遭われた後も焙煎はマスターに

しかできない仕事として、マスター自身がつつと続けておられます。そんなマスターのお気に入りのコーヒ豆はカシケ社のサントスNo.6だそうで、「これがあれば喫茶店をやっている」と思ったそうです。そんなマスターの支えになった豆で淹れたアイスコーヒーを取材中にごちそうになりました。店内の中央のテーブルにある水だしコーヒ（ダッチコーヒ）の器具で作ったアイスコーヒは口当たりが良く、とてもまろやかな味わいでした。

「やりたいことを続けてこられたし、周りにもそれなりに自分の作るコーヒが評価された。家内にはたくさん迷惑をかけたし感謝もしている。こうやって家族で仲良くやってこられたのもサラリーマンをやめて喫茶店をやってきたからではないかと思う。だから喫茶店を経営したことは悪い選択ではなかったと思う」——マスターは最後にそう話してくださいました。

隆子さんは、「喫茶店をすることたくさんの人に出会えた。もし夫がサラリーマンを続けていて、東京でそのまま過ごしていたら、きっと退屈な人生になつていたと思う。子どもたちは手をかけてやれなかったが、みんなちゃんと自立してくれたことがすごくうれしい」と話してくださいました。また、お店を続けてこられたのは、パート従業員の方々や弟夫婦の協力のおかげだし、あらびかコーヒに足を運んでくださっている人



■取材風景。隆子さんのお話を聞く。

たちのおかげです、と感謝の言葉を口にされました。

英子さんは、店の日常業務のかたわら企画担当としても大活躍です。昨年十月のリニューアルオープンの少し前にはブログを立ち上げ、その後も「出張あらびかコーヒ」など、さまざまな企画に挑戦しておられます。「これからも新しい取り組みを積極的に行っていきたい」と、とても楽しそうに話してくださいました。

創業三十四年目を迎えた温かな喫茶店「あらびかコーヒ」で、マスター自慢のコーヒをいただいでみてはいかがでしょうか。

(あかき・としゆき／文化資源学系一年生)



あつちやんと、 喫茶MG (松江市)

石川美紀

◆初めてのMG

松江市西茶町にあるレトロ口でどこか味わい深い、昔ながらの喫茶店「MG」。五月一八日、午後二時過ぎ。ランチの時間も過ぎ、お客さんは少ないだろうと思いい、この時間を狙って取材交渉に訪れた……はずでした。しかし、いざ店内に入ると、入り口近くのテーブルにも店内中央のカウンターにもお客さんの姿が

……。私たちは店の奥の方の席に座るとにしました。

MGの店内は独特の雰囲気を持つていました。こんな店に入ったのは初めてです。どうしてなんだろうと、入ったときからずっと気になっていましたが、どうやら一番の原因は壁一面に張られた張り紙のようです。思わず圧倒されました。

喫茶店に入るのは初めてではありませんでしたが、どこか場違いな感じがして緊張してしまいました。でも、この店の中心人物である「あつちやん」こと浅野淳子さん(64)に取材を申し込



■開店当時からあるマツチ。自動車のMGが描かれています。

むと、「いいですよ」と二つ返事で引き受けてくださいました。快活で明るい方だなという

のが第一印象で、取材日が楽しみにになりました。

六月一八日、いざ取材の日。店内に入ると、淳子さんは取材のお願いに訪れたときと同じ笑顔で「どうも」とあいさつをしてくださいました。

◆自転車屋から喫茶店に

喫茶MGは一九六九年八月七日にオープン。淳子さん、お母さん、弟の克行さんの三人で店を始めました。

淳子さんの家はもともと自転車屋でした。店を営んでいたお父さんは淳子さんが一〇歳のときに亡くなり、そこからはお母さんが経営を引き継いでいました。しかし世の中は自動車の時代が変わりつつあり、店を継ぐと思われるお兄さんも自動車会社で働き始めました。

そこで淳子さんは「人に頼らず女手で



■「キューピット」を作る淳子さん。

もやっついていける仕事があった」と考え、思い切って自転車屋を喫茶店に変えることにしたそうです。もし、お兄さんが自転車屋を継いでいたら、喫茶MGは存在していなかったのです。(けれど、やはりお父さんのDNAでしょうか、今、そのお兄さんは脱サラして自転車屋を経営しています。本号巻末の「R431物語」はお兄さんの店「タクワサイクル」を取り上げています。ぜひご覧ください。)

ちなみに、この「MG」という喫茶店



■店内の壁にあったMGのマーク。



にしては珍しい店名はイギリスの車、MGからとったのだそうです。お兄さんと弟さんが車好きなどころから命名しました。

◆心機一転、自転車屋から喫茶店に。記念すべき開店初日の心境を聞いてみました。八月七日、今と同じ、朝一〇時オープン。夏場だったこともあり、お客さんが結構たくさん来てくれたそうです。今は夏になるとメニュー入りするカキ氷は当時はなかったのですが、ビールもあり！とにかく何でもあり！のお店だったとのこと。昔のことなので、あまり

細かいことまでは覚えていないが、ただ「何かをやらないう」と夢中で働いたそうです。

◆「あっちゃん」

淳子さんはとても明るく素敵な方です。例えると、温かく包み込んでくれる太陽のような、母のような、とにかくMGになくしてはならない存在です。ショートカットがよくお似合いで、笑顔が輝いている方でした。

午後三時頃取材を開始し、しばらくはお客さんがいなかったため、ゆっくりお話を聞けたのですが、四時を過ぎると次から次へとお客さんが、やはり常連さんなのでしょ

う、自らの定位置であるかのようになすつと席に座る方ばかりでした。私たち取材班の相手をしてくださりながらもお客さんの注文を聞き、その際には「冷房が」寒かったら言うてくださいなね」などの気遣いも忘れませぬ。それに、淳子さんはお客さんの名前をよく覚えていて、二〇年の付き合いだそうですが、一年に一回しか来ないようなお客さんでも顔と名前を覚えていて、というのだから驚きです。

また、取材中に淳子さんが何度も口にした「縁」という言葉



■開店当時の椅子とテーブルに座る野口さんと吉岡さん。

はとても印象的でした。喫茶店をやっていたやりがいを感じるのは、松江を離れたお客さんが何年かして再び来店してくれたときだそうです。やっていて良かったと感じることはと尋ねると、この店でお客さんと知り合いになって繋がりが出来ることだと答えてくださいました。「出会いとご縁」を大切にしている方であり、だからこそ、今でも人々に愛される店なのだと感じました。

◆張り紙がいっぱい

MGの店内には壁や床などにヒノキが使用されていて、温もりを感じる造りでした。当初はヒノキの香りもしていたそうです。このデザインは、淳子さんが木の温もりがある店にしたいと考え実現し

たものです。設計には藤田丈さんという方のご協力があったそうなのですが、「MGにとつて出会えて良かった人」だと淳子さんは語ってくださいました。

木のぬくもり。——淳子さんのそのこだわりは、「家に帰ってきたような安らぎ」「ホーム」のような店にしたい、という思いからです。今では常連のお客さんは結婚し子どもを連れて来たり、その子が大人になりまた自分の子を連れてきたりと、親子三代が訪れる場合も少なくないそうです。MGは、いつまでも訪れたい、他の人にも伝えたい、そんな場所となっています。

店内は他にも、開店当時の椅子やテーブル、ランプシェードが残っていたり、壁には古いポスター、公演やライブなどのチケット、写真、定期券などが張ってあったりと、一瞬で昔にタイムスリップするかのような雰囲気でした。張り紙類はお客さんが来店記念に張って帰ったものだそうです。

中にはなんと十七歳の頃の小泉凡先生



■ご招待券とコーヒー券。いずれも開店当時のもののようです。



■ (上段)取材中。淳子さんはとても気さくな方で会話が弾みました。(下段)壁に張られたチケットの数々。

の定期券も張ってありました。ご本人に聞いてみると、張ったのは四〇歳を過ぎてからだそうです。学生時代の定期券を見つけてMGを思い出し、持って行って張ったとのことでした。

紙を張ることが出来るのも木の壁のメリットだと淳子さんは話してくださいました。お客さんは一度張るとずっと忘れずにいて、また来店したときの喜びに繋がるのだそうです。

なこともほとんどないと思います。これが、他の喫茶店にはない、MG独特の雰囲気醸し出している最大の理由なのでしょう。

◆MG＝音楽

それらの多くは「音楽」に関するポスターやチケットです。かつてMGはビートルズやレッド・ツェッペ

張り紙は、茶色く変色しているものがあつたり、押しピンが錆びついていたりと、長い間そこに張られていたことが分かります。公演やライブのポスターなどは期日がとうに過ぎていきます。普通、期日の過ぎたポスターが店内に張つてあることはなく、もちろんチケットや定期券が張つてあるように

リン、ピンク・フロイドなど、若者に大人気のアーティストのレコードが流れる喫茶店でした。店内は常に音楽が流れ、多くの学生で溢れかえっていました。学校生活や恋愛について話したり、音楽について語り合ったりと、情報交換の場であつたそうです。また携帯電話もなく、そう簡単には連絡が取れない時代であつたため、待ち合わせの場所としてもよく利用されていきました。特に用事がなくとも「MGに行ったら誰かいるかも」と思つて訪れる場所でもあり、とにかく人が集まる場所でした。

たそうです。お二人は高校在学中からMGに通っていました。現在のお客さんは二〇〇五〇代のお勤めの方が多いそうです。レコードからCDへと時代は変わり、飲食物が買えるコンビニも増えたことで、学生との縁が少し切れてしまったと淳子さんは寂しそうに話しておられました。昔MGに集まっていた音楽好きの方々とは、今も音楽で繋がっています。いつまでも壁から剥がさないポスター類の数々や、当時のことを楽しそうに話す淳子さんを見ると、「MG＝音楽」だつたことがひしひしと伝わってきます。わざわざ昔のレコードを出してきて様々なお話を聞かせてくださいました。

◆MGに詰まつた青春

淳子さんたちMGのスタッフは飲食業に関してほぼ素人の集まりであつたため、開店当時、周りの人々から三方月で潰れると言われていたそうです。しかしそのMGは一九九九年、開店三〇周年を迎え、それを記念して「Eternal Notes」という記念誌が作成されました。学生時



■ MGの常連だった高田渡さんの1stアルバム『ごあいさつ』。



■佐野史郎さんのお気に入りのレコード『IT'S A BEAUTIFUL DAY』。



■メンバーの鈴木茂さんが来店時に書いてくださった生サイン付きの「はっぴいえんど」1stアルバム。



■壁に張られた定期券。

壁に張られた定期券。料理



■ザ・ビートルズの『ABBEY ROAD』。松江で初めてビートルズの曲を流したのはMGでは……？と話してくださいました。



■ブリジット・フォンテーヌ『comme a la radio』。淳子さんのお気に入りのレコードだそうです。

代にMGへ通った佐野史郎さんや山本恭司さん、遠くからたびたびMGを訪れるようになったフォークシンガーの高田渡さんや大塚まさじさん、純音楽家の遠藤賢司さんなど、MGゆかりの人々からたくさんメッセーシが寄せられています。写真もたくさん掲載されていて、この記念誌を見れば昔のMGの様子を覗くことが出来ます。

愛のある言葉、楽しそうな笑顔の写真。

◆カツ丼を食べに行く！

淳子さんにMGのメニューについて聞いてみると、お昼の日替わり定食と雑誌の表紙を飾ったこともあるカツ丼が人気と教えてくださいました。また、淳子さんのオススメメニューとしてカボチャのカツや、手ごねハンバーグ、コロツケを挙げてくださいました。料理

当時のMGが広がります。MGで青春の日々を過ごした人々にとって、MGは自らの「拠点」でした。ここで多くの人々に触れ、音楽や文化に触れたことで、今の自分があるのでしょう。だからこそ、ふとしたことでこの場所を思い出す、そんな喫茶MGは、やはり特別な場所なのです。そしてそのMGという安らぎの場をずっと守ってきたのが淳子さん。人々にとって「MG音楽」だったのと同時に、「MGあっちゃん」だったのに違いありません。

MGは人々の心のよりどころ、ずっと変わらない場所なのです。三〇周年と三五周年には記念ライブ、四〇周年には記念コンサートも行われ、佐野史郎さんや山本恭司さんはその全てに出演されました。学生時代にMGに通っていた人や、何かのご縁で松江を訪れた際に常連となった人々など、懐かしい顔ぶれが揃い、同窓会のような雰囲気で行われたそうです。いつまでも、皆が集まればそこには

の全ては、弟さんが安い価格で最高のものを提供したいというこだわりを持ち、食材などを選びぬぎ調理しています。こだわりのメニュー、ボリュームたっぷりのメニュー。でも、取材の日はお昼どきを避けて行ったため、キューピットという飲み物（カルピスのコーラ割り）を飲んだだけでした。「あの山本恭司さんも好んで食べたというカツ丼を食べなければMGは語れない！」と思い、八月七日、カツ丼を食べるために再びMGを訪れました。とろとろの卵とお肉の味がしつかり活かされた優しい味付けが口の中にふんわりと広がります。友だちを誘って四人で行ったのですが、みんなが絶賛。多くの人に支持されてきた理由がよく分かりました。

松江の人々に愛されてきた喫茶MG。これからも人々が気兼ねなく帰って来られる場所として、いつまでも変わらぬにいてほしいです。私がMGと淳子さんに会えたこと

も何かのご縁なのだと感じます。今度訪れるのがいつになるかと、淳子さんは明るい笑顔で私を迎え入れてくれることでしょう。

(いしかわ・みき／文化資源学系 二年生)



■MGのカツ丼。この味、この香り……もう、たまりません！